様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 １ 日現在

機関番号：２２６０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５４６３４８８

研究課題名（和文）妊娠期からの早期育児支援介入プログラムの開発研究

研究課題名（英文）Early Intervention Program to Support Parenting during Pregnancy

研究代表者
園部　真美（SONOBE, MAMI）

首都大学東京・人間健康科学研究科・准教授

研究者番号：７０３４７８２１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：A助産院に通う初産婦を対象として介入群計13名に対してマタニティクラス(プレママのための赤ちゃんクラス）を開催し、胎児の発達、新生児の睡眠と覚醒、乳幼児のサインの読み取り方、親子の関係性に関して早期育児支援介入を実施した。介入群には妊娠中介入前T1、妊娠中介入後T2、産後１か月T3の時期に、コントロール群12名に対しては妊娠中T1、産後１か月T3の時期に質問紙調査を実施した。その結果、介入群では介入前後で養護性尺度の下位尺度である非受容が有意に減少し、母親の胎児への愛着が有意に上昇した。産後1か月においては新生児への愛着、産後うつ共に介入群とコントロール群で有意な違いはみられなかった。

研究成果の概要（英文）：This research seeks to assess the effectiveness of an early intervention program we designed for presentation during pregnancy to support parenting. Both groups of participants were primiparas attending a birth center. Maternity classes were held with the 13 members of the intervention group. The program addressed fetal development, baby’s sleeping and waking states, recognizing baby’s cues, and the relationship between mother and baby. A questionnaire was conducted with the intervention group during pregnancy before intervention (T1), during pregnancy after intervention (T2), one month after birth (T3), and with the 12 members of the control group during pregnancy (T1), and one month after birth (T3). Results: mothers’ attachment to the baby increased significantly and on the subordinate nurturance scale, non-acceptance decreased. One month after birth, there was no difference between the two groups regarding attachment to the baby or on the postnatal depression scale.

研究分野：母性看護学

キーワード：早期育児支援介入　親子の関係性　母子相互作用　Cueの読み取り　養護性　愛着　初産婦

１．研究開始当初の背景

(1) 我が国の妊娠期の支援は、妊婦健診における個別の保健指導、両親学級などの集団指導がある。妊娠中の保健指導は、安全な妊娠・出産をめざして、妊娠週数や妊娠経過に応じて運動・食事などの生活習慣、安産や妊婦とその家族の望む出産となるための準備が行われている。近年では助産師外来において助産師による母体と胎児のフィジカルチェックや保健指導がなされ、産後まで継続したケアができ、満足のいく出産となったという評価が多く、その役割は拡大している。

(2) 妊娠期の継続的な心理支援が、胎児感情や産後の抑うつに良好な結果をもたらしたとの報告にも見られるように、産後の抑うつが育児に影響を及ぼすことからその予防は注目されている。しかし、母親の心身の健康は、子どもの健康、気質、育てやすさなど、子どもの特徴によるところが多く、子どもとの関係性抜きで母親の支援をすることはできないのが現状である。

(3)妊娠期の研究や支援は、母体の健康や出産準備教育に重点を置かれたものが圧倒的に多く、子どものサインの読み取り方、子どもへの応答の仕方など、母子相互作用にまで注目したものは極めて少ない。本研究は、妊婦を対象に、妊娠期に母子相互作用促す介入支援を実施し、通常の支援のみ受けた妊婦をコントロール群として、妊娠期に実施した介入効果を産後に検証する、初めての早期育児支援介入研究である。

２．研究の目的

(1) 本研究は、出産後開始される母子の交流に対して、まだ子どもが産まれる以前の妊娠中に、母子の相互作用を促すための支援を行う介入研究である。初期の親子の関係性は、後の子どもの発達、とりわけ社会性や情緒の発達に重大な影響を及ぼす。育児経験がないまま親となる母親が増加し、子どもの育て方に苦慮し、時にはマルトリートメントが起きることがあり、産後の育児支援では時期が遅すぎると指摘されている。そのため産後の子どもへの対応や関係性に着目した支援が不可欠となる。研究代表者が今まで実施してきた産後の母子への家庭訪問による母子相互作用を促す研究をもとに妊娠中に早期介入を実施し、介入効果を実証することを本研究の目的とする。

(2) 母子相互作用に関する研究は、客観的な評価方法や介入支援が少ない中で、研究代表者らは、所属する NCAST 研究会において、米国で開発され世界各国で活用されている NCAST (Nursing Child Assessment Satellite Training) の母子相互作用アセスメント・介入支援ツールを用いた研究に取り組んできた。母子相互作用とは、子どもの表出する言語・非言語的なサインを親が敏感に察知してそれに応じた対応をする、また、親の反応によって子ども自身も影響を受けるというような母子両者間のやり取りを指す。母親と子どものどちらか一方、あるいはそれぞれを個別に評価するのではなく、一つの場面を双方からの視点で分析することに特徴があり、客観的評価ができる数少ないアセスメントツールの一つである。

(3) この NCAST プログラムの一つに、妊娠中の母親のメンタルヘルスを促進する支援がある。これは、親から子どもへの bonding、子どもから親へのアタッチメント、初期の脳の発達の重要性、子どもの情緒的・認知発達を促すための支援まで含まれている。母親の妊娠中のメンタルヘルスや情緒的な健康状態が、後の子どもとの関係性や子どもの社会・情緒的発達に直接的に影響を与える、というエビデンスに基づき、妊娠期に支援する専門家に対してトレーニングプログラムを提供しており、本研究もこの理論を取り入れ実施するものである。

３．研究の方法

(1) 研究期間：平成 25 年 11 月～平成 27 年 10 月

(2) 対象者：A助産院に通院中の介入群初産婦は計 13 名及びコントロール群初産婦は計 12 名である。A助産院における 1～4 回の通常のマタニティクラス参加者のうち、追加の早期育児支援介入クラス「プレママのための赤ちゃんクラス」の参加に同意が得られた初産妊婦を介入群とする。介入群とコントロール群との区別が出産予定の妊婦同士で情報交換したり支援の不平等感を生じたりしないよう、早期育児支援介入を実施する時期（6･7 月、11・12 月、3・4 月）と、しない時期（4・5 月、9・10 月）とに分ける。追加クラスの呼びかけを実施していない助産院の通常のマタニティクラスを受講している初産婦をコントロール群とする。

(3) クラスの内容：研究代表者（NCAST PCI インストラクター資格者）と共同研究者（NCAST 有資格者）による 1 時間半のクラスを実施する。5～6 人程度の少人数のクラスを実施する。①胎児の発育と感覚器の発達②出生直後の新生児の行動と能力③新生児の意識レベルの状態（睡眠と

覚醒）④乳幼児のサインの読み取り方とぐずった時の対処法⑤新生児の self regulationなどを参加者と話し合いながら提示していく。

(4)　データの収集方法と質問紙

①介入群にはクラスの前後で質問紙調査を実施する。養護性尺度および母親の胎児への愛着尺度(Parental Attachment Inventory: PAI)を用いる。コントロール群には通常のマタニティクラス第 3 回目に養護性尺度および母親の胎児への愛着尺度(PAI)を使用する。

②1 か月健診時に介入群およびコントロール群の両方に母親の乳児への愛着尺度(Maternal Attachment Inventory)およびエジンバラ産後うつ病調査を渡し、郵送で回収する。

(5) 分析方法

介入前後における介入群の質問紙調査の比較、妊娠中と 1 か月後における介入群とコントロール群の質問紙調査の比較をそれぞれ対応サンプルによるWilcoxonの符号付き順位検定、独立サンプルによるKruskal-Wallis 検定を行う。有意水準を0.05 とする。統計解析ソフトSPSSStatistics21 を用いて統計学的に分析する。

４．研究成果

(1)　7 月､12 月､3 月に早期育児支援介入「プレママのための赤ちゃんクラス」を実施し、参加者はそれぞれ 4 名、2 名、7 名であったが健康上の理由により 1 名除外された。従って介入群は 12 名となった。コントロール群は 5 月、10 月に質問紙調査を実施し、それぞれ 5 名、7 名、計 12 名の対象者が得られた。

(2) 研究対象者の平均年齢は、介入群 31.2 (SD3.4)歳､コントロール群 31.8(SD4.7)歳であった。早期育児支援介入クラスに参加した時の介入群初産婦の平均妊娠週数は、22.8 (SD6.8) 週であった。

(3) 早期育児支援クラスは、「とても満足」が 8 名 (67%)､「満足」が 3 名 (25%)、少し満足が 1 名 (8%) であった。内容に関しては、「とてもわかりやすかった」が 9 名 (75%)､「だいたいわかりやすかった」が 3 名 (25%) であった。早期育児支援クラス参加者からは、赤ちゃんのサインの読み取りが興味深かった、胎児のことがわかってよかった、少人数のクラスで話やすかった、という意見が多く聞かれた。

(4) 妊娠期のベースライン調査においては養護性、胎児への愛着ともに両群に有意な差はみられなかった。介入群においては介入前後で胎児への愛着が有意に上昇し、養護性尺度の下位尺度である非受容性が有意に下がった。

(5) 妊娠生活の満足度、出産の満足度、産後 1 か月の乳児への愛着､エジンバラ産後うつ病調査は両群に有意な違いはみられなかった。

以上のことから、早期育児支援介入の短期的効果として胎児への愛着が高まり受容性が高まることが考えられた。しかし､1 か月後の乳児への愛着、エジンバラ産後うつ病調査から、長期的効果はみられなかった。今後、施設や対象者を広げて早期育児支援プログラムの見直しを行い介入実施と評価の研究が必要である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）

① Sonobe Mami, Usui Masami, Hiroi Kayoko, Asai Hiromi, Hiramatsu Mayumi, Nekoda Yasutoshi, Hirose Taiko: The influence of older primiparity on childborth, parenting stress, and mother-child interaction, Japan Journal of Nursing Science 13(1), 査読有, 229-239, 2016

〔学会発表〕（計２件）

① Mami Sonobe, Masami Usui, Taiko Hirose: Early Intervention to Support Parenting during Pregnancy: Recognizing Infants' Cues and Interactions. ICM Asia Pacific Regional Confeerence2015, 査読有, 2015.7.21, PACIFICO Yokohama (Kanagawa,Yokohama)

② Masami Usui, Mami Sonobe, Misaki Nabeta, Yumi Katsukawa, Sakanashi Kaoru: Parent-child Interaction and Related Factors at 3-4 monthes after Birth in Couples of Elderly Primipara; Comparison with Primipara Couples Aged 35 or Younger. ICM 30th Trienninl Congress, 査読有 ,2014.6.1,Prague (Czech Republic)

６．研究組織

(1)研究代表者

園部　真美（SONOBE, Mami）
首都大学東京・人間健康科学研究科・准教授
研究者番号：７０３４７８２１

(2)研究分担者

廣瀬　たい子（HIROSE, Taiko）
東京医科歯科大学・保健衛生学研究科・教授
研究者番号：　１０１５６７１３

臼井　雅美（USUI, Masami）
帝京平成大学・ヒューマンケア学部看護学
科・教授
研究者番号：　５０３４９７７６